精神病理学的立場からみた ニーチェ思想の枠構造（1）

木 阪 昌 知

序
1. 精神病理学的系列にみたニーチェの位置
2. 精神病理学的素材としてのニーチェ

> 死よりましな病というのは死の一断片にすぎず，死が演ずる影絵芝居とも言えよう。この断片から建築が出来るということはないものだろうか。心の苦悩と心の病とから，狂気から，より強くより偉大なもの壮大なものが生れ，天才や聖者が生れてくるのである。[1)]

序

ニーチェは存在自体が既に極めて特異な現象として類例のない反響の契機を喚起している。しかし，哲学がそもそも自らの人格の映像，自己告白，一種の意図せざる記憶にほかならないとすれば，相関的にニーチェは様々な信憑と認識の総和をのりこえて客観的検証を要求する歴史的問題となる。即ち，制圧する論証的思惟に被覆された神学的理性に対して客観性の探査を旗印に真理の絶えざる汚染を告発し，擬似弁証家の擁護する教皇権威主義的行政組織を危険と警鐘して自ら悲劇的現象の鉄槌となったニーチェは，まさに臨床的描写の傑作として弁証的矛盾の種を精神病理学的に蒔き散らし，しかも異常の絶頂にあってのみ全精神を支配し，妄想を認識する原理を不可抗的なまでに高めえたから

である。したがってニーチェの場合，個人的，個別的な要求や努力の角度から試みる検討は彼を一つの公分母に還元し，そればかりかキリスト教に対する敵意や憎悪，否むしろ流血をすら望んでいた情緒的衝動を抹消して核心を遠ざける。内的，病的な情緒反応から起るある統制し難い衝動の影響のもとに行動した場合の哲学者を理解せんとすればおのずから，精神病誌あるいは精神分析の医学的症例の他に相応してせまるものはなく，とりわけニーチェにあって自己告白ならびに人格の映像が世界史的評価の関係と一体となってニーチェを高めているとすれば，他の如何なる系列者にもまして現象と一体となったニーチェを病理学的に検証することはさけられないと思われる。

たとえばワイヤーやガリレオが獲得，覚醒した科学的好奇心を啓示的冥想の枠内にひき戻そうとする護教主義者の恐れは，純粋な観察経験的推理の帰結であって，それ自体キリスト教の本質をそこなうべく意図されたものではない。が，ニーチェのそれは完全な治癒又は少なくとも緩和を期待し得る慰安の場所が既に間断なきまでの破壊と攻撃の自己主張であり，器質的なものと心理的なものの統合としての自己破壊である。それ故に科学と形而上学的論議やある種の修辞学的観念論に照応してみせる護教主義的哲学とは本質的に異なる。いわば無節操な妥当欲と東洋風誇大妄想が惹起した激越な体験の総合が彼の本質であり，進行麻痺の臨床的記述を認めることなくしてニーチェを語ることは出来ないからである。

意志と表象[2]の二分はショーペンハワーの二重性と人格の分裂を無視しては読めないし，暗く不気味で何時も彼岸的調子をおびた霊気につきまとわれているポーやバイロン，レーナウ，ホフマン，神経症的ヒステリーで信奉者を困惑におとしいれるワーグナー，ベルリオーズ，モリエールがしかし，それ故に不当な評価をこうむったということはない。霊感とか神秘的で異様な経験は上昇していく活動力として多幸的・誇大的気分を高揚させ，彼の独自性をますます強調する場合というのがあるからだ。ニーチェにとって進行性麻痺は精神的創造力促進に関与するのみならず彼自身の実存と一体となって自らを高め，みごとにクレペリン[3]の思惑をつきぬけて半静的見解の対岸に立つ。そしてまさに

あのドイツ的なもの，宗教的で感傷的で形而上学的な伝統，既成の諸価値の破壊者として現実の全領域にまで波及していく。諸々の矛盾と客観的な欠点のかずかずに実証されて尚ニーチェは，極端に亢進した破壊と没落への意志で広範な反響をひきおこす。この突如として，一文献学者という素因の中から沸上った比類ない権力感情に動機づけされる破壊欲は，精神病質的体質に由来する遺伝的負荷が進行性麻痺の経過，強さ，進度を修飾して居り[4]，彼に相応した評価は何よりも，彼が進行性麻痺であったという事実から出発するのである。

1. 精神病理学的系列にみたニーチェの位置

トリノの粗末なイタリア人夫妻の下宿で全くの独り暮しをしていたニーチェは1889年1月3日，近くの路上に昏倒した。1月18日イエナ大学病院精神科に入院，1890年3月24日退院許可を得てナウムブルクの母のもとにかえり，晩年はワイマールで妹の保護と看護を受け，1900年8月25日没した。イエナ大学病院精神科私講師チーエン博士の診断は進行麻痺性の精神障碍で，病誌学者ベンダと意見を同じく梅毒感染後に惹起される増悪期の症候群を顕著な徴候にみたてている。

1865年2月，ニーチェは1人でケルンに旅をして娼婦から梅毒に感染，6月には感染第1期症状の刺す様な頭痛と極度の疲労があらわれ，7月に第2期症状としての早期梅毒性脳膜炎，即ち，脳軟膜を犯す急性非化膿性リンパ球性炎症が現われ，73年に第3期脳梅毒，眼痛と視力障碍をともなう頭痛の発作，嘔吐をともなう胃痛が進行麻痺へとつながる[5]。80年1月は脳梅毒の絶頂期にあり，2月に進行麻痺が始まる。

組織解剖学上確認されているニーチェの進行麻痺とは停止性麻痺のことであり，それは，初め全く緩慢な症状で進行しながら促進的に創造力を高揚させ，ついで突然悪化があり，僅か数週間のうちに完全な不治の痴呆に陥るというものである[6]。

1879年12月28日，フランツ・オーフェルベック宛葉書[7]でニーチェは，最悪の場合を覚悟した脳梅毒の絶頂期を迎えている。しかしそれまでの最後の発作

にたえず見舞われていたニーチェが80年2月から突如として軽快となり，80年11月17日，ペーター・ガスト宛[8]の手紙では高揚した気分の中から抑制し難い多幸的，誇大型の症状が著しく発展してくる。停止性麻痺が始まったこの80年から痴呆をともなう進行麻痺の第2回目の増悪期をむかえる89年までの，じつにこの9年間のうちに世界的評価を得るニーチェの作品が完成している。それ以前の作品である『悲劇の誕生』はニーチェの哲学的思考様式及び文献学的知識の曖昧さの故にヴィラモーヴィッツ・メレンドルフによる手痛い批判をこうむり，ワーグナーへの性急な期待が駆りたてた時代はずれの思想を自ら回想して，悲劇的本性に支えられた認識の基盤があまりに偏執的で強引であったことを告白している[9]。1873年から76年にわたる『反時代的考察』はその直接の動機が，バイロイトに自分の劇場を完成させようとして資金集めが思惑をはずれて難行するワーグナーの憂鬱のうさ晴しに吐き出されたものである。しかし，劇場という平均化，平等化をすすめるワーグナーに対しその時既に片方の手でワーグナーに復讐すべく『ワーグナーの場合』を書き始めている。76年から79年に至る『人間的，あまりに人間的』はニーチェの作品の中では最も反響をおこさなかったものの1つである。一方生理学的には脳梅毒が徐々に滲透して，頭痛，胃痛，眼病が頂点に近づき，バーゼル大学での義務の一切が免除される。しかし，パルジファルによる転向をめざしていたワーグナーとの決定的離反をむかえてニーチェは更に深く傷つき，本能の全体的迷誤のただなかで自らに対する焦躁が死の予感と一体となって愈々形而上学的主題へと急進していく。かかる点からして『悲劇の誕生』『反時代的考察』『人間的，あまりに人間的』の作品はワーグナー音楽を悲劇的芸術の伝道者，悲劇的世界観の告知者としている点に於て一致し，しかもニーチェ思想の主要概念たる＜超人＞，＜権力への意思＞，＜永劫回帰＞，＜君主道徳と奴隷道徳＞を含んでいない点に於てあきらかに別の系列から観照すべきと思われる。キリスト教はまだ官能性の不倶戴天の敵として登場せず，ただ陶酔的現実としての根源的旋律のみがソクラテス的精神から解放する光学的律動であると信じて疑わなかった。しかるに80年が始まるや一挙に肉体に加えられる苦痛に付帯して多幸的，誇大的妄想幻覚症候群

が進行し，世界没落の予感がひしひしと脅迫感情となってニーチェにせまってくる。自己主張を叫ぶ人間の実験は単に精神の崩壊にはとどまりえなかった。ニーチェは拒否と無視の沸騰する血の洗礼を受けながら癒し難い破壊へと突き進むのである。

ニーチェに同じくこの停止性麻痺の疾患に陥った人達にボードレール，レーナウ，ヴォルフ，ゴシクール，マカルト等がいる。しかし，彼等の体験の異常さと比較してみてもニーチェはその程度に於て遙かに近寄り難く危険で，一層深刻で過激であったとしか言いえない。たとえば，ボードレールにとって神を離れて生きる存在方式は情熱をかりたてる刺戟にすぎないし，この遍歴者の狂気には相当の余裕がある。ゲーテやシラーにくらべれば自由奔放さも暗く不気味であるが総じてレーナウの憂鬱さには改善の余地がある。神経症的ヒステリーの疾病を先天性としていたワーグナーの最も熱心な使徒であったヴォルフが歌曲の重心を伴奏部に於ける動機の交響曲的展開に移しおえた業績は後期ロマン派に属する重要な作曲家として評価出来よう。しかしワーグナー的疾患の熱烈な盲信者にとって世界史的な意味での危機も使命も無関係で，いつも忠実であることのみが彼の特性であった。ゴンクールは何にでも関心を示す類いの男で，その範囲の広さがおそらく進行麻痺にまで手を広げたにすぎないと思われる。およそ詳細な芸術史をみても好意的な批評家の口にものぼらないのがマカルトで，時代はまさに彫刻と建築に於て画期的革命のただ中にあり，古典派，ロマン派を脱した印象派の先駆者が様式と流派で新たな実験を試みている世紀を経験しながら色彩の豪華さと画面の広さに於てしか注目をひかない彼はこの名誉ある進行麻痺のニーチェ的系列には属し難いと思われる。作品に相応した美しい抒情性と高い知識を備えたシューマンには停止性麻痺が創造力を上昇させたと考えるのはたとえ事実を無視したとしても残酷である。彼の存在はそれ自体が既に華麗で優雅で，ニーチェの惜しみない賞讃を受けるに十分であった。がニーチェの停止性麻痺には誰もが経験しえない15年に及ぶ苦痛の長い脳梅毒の前兆があり，しかもその厳しい亀裂を刻みこんで更に9年間の孤独な長い冬が続いている。したがっておのずから彼等とは存在自体が異質であり，存

在の諸現象に偏執して過去を反芻，未来を煩悶するさまには追体験を断じて許さない宗祖的気分があり，彼の貴族的格調は何よりもその苦痛の深さに比例していると思われる。

人物と運命に於て人類の犠牲になったモーパッサン，ゴッホ，ストリンドベリ，クライスト，チャッタートン，ワイニンガーらは理解を得るのに長時間を要した。しかし彼等は犠牲の祭壇と墓穴を自ら意欲していた訳ではない。彼等は人々と別な道を自己の主張と意欲に従って選んだにすぎないのであり，いわば自己の過失の負い目を自ら償ったにすぎない。したがって彼等に寛大になる必要はない。ニーチェの生の独自性は空虚な思弁を論じて神秘主義を新興せしめることでもなくば，個人的嗜好の極めて強い形而上学的世界観を創りだすことでもない。人類にとって何らか意味のある世界を創る為の，人類を偉大にさせる道を探る為に自ら狂気の指揮者として破壊し，没落することであった。この無私的態度の，歪曲された本性の異常さこそ彼の卓越せる陶酔現実的意志の力である。したがってニーチェの崩壊は不完全な燃焼に油をそそいで得た狂気の代償である。ニーチェと彼等の決定的相違は結果に原因するのではなくして彼等を支配していた世界観，価値観，そしてその意図を実現する方法があまりに形而上学的でありすぎたことによる。

同時代の人の理解を全く得られないばかりか自分の所在と系列さえ知らず，苛酷な生の代償としてみじめな死へと迷いこんだレンツやヘルダーリン，ビュヒナー，ヘッベル，グラッベ，ニーチェはこれら真面目に同情を寄せないではいられない人達の仲間にも属している。少なくとも彼等のものうい憂鬱と倦怠の残滓は自分自身のものであり，何処へ導かれるか分らない不安の迷路で毅然として立ち，全くの無名のまま，しかも大胆な想像力と鋭利な観察で核心を突きぬけ，主体的実存の内面にかかわって自らの中枢となっている。ニーチェにはその中でもとりわけヘルダーリンと歴史的実存を追体験する近親関係がある。テュービンゲンの神学校で敬虔な緊張に包まれていたヘルダーリンは，芸術に仕える為地上の生活に対する反逆者として典型的内向者となり，悲劇的運命を自覚しながら没落の感情に支配を任せ，自らの暗い影として漂泊者となる

のである。しかしあくまでも超越的世界に向うギリシャ的勇気と巨人的意欲が浮力となって独自な主張は益々普遍的価値の一切を退け，認識の背後でついには絶対一者へと到達する。血に至るまでの苦しみの中で極度に高められた自分自身の姿を認めるこの詩人パエトーン[10]はニーチェの二元論的不協和音とみごとに一致して錯綜し，より高く上昇する為に深紅の闇に包まれて夜の底へと沈んで行く。しかしこのヘルダーリンでさえニーチェとは袂を分ってしまう。彼等は単に歴史的実存を体験しうる要素の中から出発したというにすぎない。ニーチェは停止性麻痺に陥り，人類の犠牲となって自らを食い尽し，全く理解の外にあって三重の苦悩を背負い，パエトーンというよりはむしろアハスフェルス[11]を体験したのである。高い世界を信ずるあまり足元の憂欝に引き沈められるヘルダーリンに比してニーチェは己れ自身の明るさの故に焼け死ぬのである。白熱し，炎焼する最高度の灼熱，己れの炎による精神の崩壊である。超越的な力に支えられて人類の新しい殉教者となったジョルダーノ，ブルーノ，ジャンヌダルク，イエスにも匹敵する歴史的事件である。

しかしニーチェとこれら孤独な思想家を明確に区分する絶望的な経歴が更に決定的と言える程氾濫している。1人の娼婦から梅毒に感染して以来ニーチェは自然科学的，医学的蒙昧さの哀れなる犠牲となり，全生涯にわたって極端な限界体験と想像を絶する病気のかずかずにつきまとわれる。この気紛れな娼婦の影が彼の唯一の同伴者である。ニーチェはその全生涯にわたって誰かに愛を向けたとか愛されたという経験を持たない。彼のあまりに強い誇りがそれを拒否させたというのではない。どちらかと言えば娼婦とのみ交わりを持つ様な性的偏執と倒錯がそれを妨げたのであり，ヘルダーリン，クライスト，カント，キルケゴールの潔癖さからはいささかはずれている。しかしそれでも彼が何時も1人であったことにかわりはない。彼が求めていたのは彼の自負心を謙虚に理解してくれる臣下であって配偶者ではない。しかもニーチェが得られなかったものは愛情にとどまりえない。彼には傷つき痴呆となって迎えられる母の慈悲深い故郷をのぞけば頭痛と胃痛，そして眼病が終生彼をアハスフェルスの道へといざない，自らの影として孤独な流浪を果しなく続けるのである。1

人の知己もなく，祖国も定職も神もなく，全くの1人でみじめな病気と貧困を体験したのである。おそらくこの意味に於て彼に匹敵するのはキルケゴール，ヘルダーリン，スピノザぐらいなものであろう。ワーグナー音楽の旗手として芸術による文化のギリシャ的再生を実現しようとしていたニーチェの期待が，パルジファルによるワーグナーの転向で彼を失って以来，友情と青春のおおまかな興奮を分ちあったローデすらも切り離し，およそバイロイトに関係する一切の友人，知人，母から妹に至るまで拒否してしまう。救いようもない程の共感や同情，瞬間的な感情の虜になってしまう素質を持った傷つき易い魂に背信，失意，痛恨，三重の苦悩を背負った孤独を押しつけるのは遙かに想像を絶している。苦痛を濾過して蒸留する方法をニーチェが知っていなかったならばあるいはもっと楽な破滅に至ることが出来たかもしれない。しかし，危険な歴史の曲り角に直面しているという意識がニーチェに圧倒的影響力を求めて放さない。これは殉教の死を課せられた悲劇的本性の宿命である。

とは言ってもそれを病気の熱におかされた彼の容赦ない拷問の刻印として認めるわけにはいかない。それは更に根源的な問題としての取り扱いを要する。何故なら，そもそも神を殺害したのはニーチェその人であり，『反時代的考察』でバイロイトに於けるリヒャルト・ワーグナーを絶讃しているかと思えば片手で『ワーグナーの場合』を書いていたのも事実だからである。たしかにニーチェの孤独に匹敵する者はごく少数であるし，禁欲，無私，平等思想の終末的世界観を告発し，可能な思想の他の類型を歴史的段階で実験に試みる世界史的事件として他の者の追随を許さない危機の先どり，自らを犠牲に供して価値観の原点に立返るさまはまさに宗教家のそれである。弱さの意志に由来する彼岸的命法に対して強さを基準する此岸的命法のディオニュソス的陶酔をもって高揚する精神の実存解釈を企てるニーチェに対してシュペングラー，ヤスパース，ハイデッガーらが惜しみない讃意を表するのも当然である。ニーチェをどの地点に於て解釈するかはその人の好みの問題である。しかし紛れもなくニーチェという事件を通してでなければ19世紀は終らないし20世紀を始めることも出来ない。彼は看過を許さない存在への疑問符なのである。

2. 精神病理学的素材としてのニーチェ

従来ニーチェを評価するに際しては最も内面的な本性として自らを承認し，生存に対して純然たる貴族的態度で振舞う独自な実存経験に焦点がしぼられすぎていたきらいがある。苛酷な運命の軋轢に影響を受けることなく創造の主体として徹頭徹尾誠実に感動的な運命愛を生き，実体不透明な現実の諸相に対し逆遠近法的に観照者の立場に立つニーチェをあまりに強調しすぎたのである。あるいは精神病誌学的，精神分析に偏して生活の現実と主張の楯を別個に扱い，心理現象の科学的範疇に処理してしまった乱暴な学者もいる。病気と健康の概念を固有の二義性に於てとらえ，双方の関連を原因と結果の因果関係で新極面をめざしたヤスパースの実績は前者にくらべると明らかに著しい。解釈を試みる場合の展開の方法としては最も望ましいと言える。しかしニーチェにあってその全体をそこなうまいとするあまり，あるいは統一した普遍性を求めるあまり彼の作品が彼自らの人格の映像であり自己告白であるという点をそれぞれ看過している。一種の意図せざる，したがって又気づかれることのない記憶であるという点を再び問い直してみればおのずからニーチェが<権力への意志>とか<超人>，<永劫回帰>，<君主道徳と奴隷道徳>といった思想の背後でひそかに隠していたものがドストエーフスキーの作品の中で露見する彼自らの性癖，精神病質の様に浮かびあがってくる。それは単に彼の病質が作品に反映するといった詩人によくある告白の記録でもなくば，あまりに鮮明かつ強烈な色彩の故に狂気にひきこまれたゴッホの場合とも異なって一語一句が自己破壊の証であり，異常な精神障碍は極端に亢進した彼の本性そのものであることが分る。犠牲となって自らを高め，神聖視された価値を犯す勇敢さも兼ね備え，追体験を許さない程独創的であったニーチェが他の誰にもまして苛酷な生の系列の最先端にいなければならなかったその理由は彼自身の陥った進行麻痺によるものである。そして促進的に働きかけるこの高揚の気分が言葉となって吐き出されるのである。したがって病気と作品は完全に混合し，みごとなまでに一体となって箴言を核心に突き刺す。病気は彼そのものであり，ニーチェは

病気の影として夜をさすらう。明らかに病気でなかったならばかかる世界史的問題としてのニーチェはありえなかったであろうというのは仮定法の現実的根拠として迫真力があり，レーヴァーキューンが投影する悲劇的本性と驚く程一致する。ニーチェは病気そのものによって解放され，この産婆の力を借りて誇らしい言葉を語り，あえぎながらも陣痛の痛みに耐えるのであり，崩壊を前にして寛解の安らぎは比類ないまでに認識の渉猟者を誘惑し，厳しく残酷で仮借ない非妥協の精神を求める。自己破壊の衝動は次第にニーチェの精神的性癖となって嗜虐のおもむきさえ呈してくる。しかも高揚して創造力を亢進させるこの進行性麻痺は梅毒以外にも高度の内因的要素，即ち，精神病質的体質に由来することが確認されている。進行麻痺の経過，強さ，進度は遺伝的負荷によって修飾されるのである。ニーチェの場合彼の精神病質的特徴の影響を無視して進行麻痺と作品の関係だけを論じるわけにはいかない。性格の特徴から証明しうる彼の過激性，我欲，妥当欲，性的偏倚といった様なもの，更には好戦的で戦闘欲に著しく，攻撃性にみせる激しい破壊の快楽は生物学的遺伝の点で既に彼に精神病質を認めているからである。ニーチェの父は脳腫瘍で死んでいるし，父の姉妹は偏頭痛，ヒステリー症と報告されている。母親は偏狭でその兄弟は精神病院で死亡，姉妹には自殺した者がいる。ニーチェの妹は偏頭痛もちで精神病質的であった。ゲーテの家系には遠く及ばないがそれでもまれにみる遺伝的負荷の重荷を背負って生きる宿命の血をひいていたことは確かである。実際天才と言われる人達の90%以上が精神病の素質を有していることを思えばニーチェのみが稀有な症例の中で生きた特別の人とはならない。しかし，遺伝的負荷によって修飾された精神病質的特徴のかずかずは進行麻痺に陥って1，2年で痴呆症に至る単純な普通型にとどまらないで梅毒感染後の15年と崩壊に至る9年の計24年に及ぶ増悪期の症候群に対する戦いの歴史であった。大部分の天才は精神病者ではなくして精神病質者であり，狂気の波にうちさらわれるのは主要作品を創作した後のことである。カントも，コペルニクス，スタンダール，ボードレール，レーナウ，マカルト，レンツ，ヘルダーリン，全て外見上作品とは関係のない所に位置して終極を迎える。ニーチェ的意味で精神病に

陥って尚価値の高い創造をなしえたのはブレイク，ネルヴァル，ベルン，シューマン，ゴッホだけである。しかしニーチェ程長期にわたる重症の精神障碍者もいなければそれでいて世界史的作品を創造出来た者も類をみない。シューマンの歌曲はただもお美しく，抒情的和音には軽快で知性があふれている。『シルヴィー』や『オーレリア』の夢幻的雰囲気や宗教的恍惚はネルヴァルの体験が動かし難く認められる。奔放で幽幻な想像力をもっていた神秘思想家ブレイク，19世紀を一気にとびこえたゴッホ。しかしこの中の一体誰が人類の未来と運命に関して世界史的問題となり，又扱いえたであろうか。人間全般にわたる無価値と下劣さ，怠惰の欲情に衰退する力への意志，歴史が必然する時代の要求に逆行して病的で乏しい良心，これら精神の頽廃に傾向著しい歴史の曲り角に直面して危機を直感し，確実なもの，証明可能なものの中で自ら第1運動の原因となることを求めたニーチェに匹敵するのは誰であろうか。

精神を煩った者の病像は比類なきまでに特有の思考や感情を発展させ，たえず外界との交渉の障害になる。勿論ニーチェとて例外でなく，精神活動と自我の力は減退し，思考は軌道をはずれて飛躍的で断片的となり，前論理的矛盾がたえまなく交錯する。変幻自在のプロテウスが彼を支配し，まるでヘロストラトス[12]につかれた様に荒狂う。論証不可能なまでに形而上学的主張の試みは退き，彼の前景は内因的なものに由来する戦闘的，破壊的，攻撃的本能だけになる。予言者，哲学者の顔は政治的，軍事的誇大妄想を隠す仮面にすぎないことは明らかである。ラスコーリニコフの仮面の下にドストエーフスキーがひそんでいる様にツァラトゥストラはニーチェの仮面である。彼は既成の諸価値の一切，否それのみならず経験を許す限りのあらゆるものに破壊的，否定的となるのである。思想や事実の真偽，優劣，是非を判定して価値を明らかにし評価を下すあのギリシャ語の語源など[13]文献学者の素顔を捨てた彼には最早全くの無関係である。科学的認識を最も不得意としていたニーチェは感傷的に，懐疑的に，衝動的態度に没頭していく。彼の告白はしたがって残酷で容赦ないのである。

ニーチェにあって精神病質的体質に由来する遺伝的負荷が彼の創造力を亢進

させるのでなければおそらくニーチェは形容矛盾の驚くべき実相を古代ギリシャの審美的世界に披露した詩人にとどまったと思われる。ニーチェが比較を断じて許さない世界史的系列に属するのはこの彼の生の独自性による。即ち彼が精神を煩い，しかもそれが進行麻痺の寛解期には高揚の気分を代償として得たことによる。実際彼の全作品は彼の病気の内に属するし，たえまなく襲ってくるあの死の予感のあいまをぬって書かれたものである。したがって健康な者，自分が得られなかったものに対する憎悪と復讐は一段と語調を強め，病気とみじめな貧困の反動として自分の帝国と忠実な下僕がたえず渇望されている。彼の誇大妄想はますます増大し，方向を失った狂気はただ直線上しか走らなくなっている。

精神病質者90%が獲得する天才の名声は事実上精神障碍と作品の関係を否定出来るが，狂気に陥ってしかもその体験を作品の内容にまで実現出来た人達もいる。その場合，体験を形象に高める為に細胞の破壊の進んでいないことが要求されるが，いささか異常な興味，奇抜な独創性，神秘な調子はずれの雰囲気はおもわず人をひきつける。たとえば麻薬中毒がおこした一時性精神病質者，ド・クインシー，ボードレール，ポー，ホフマンらの作品の中には永遠に魅力的な異様さがある。しかしこの異様さは人を驚かすに足りる程度のもので，精神病理学的素材としてはむしろものたりない。診断の確定を完全に無視する程の異常さ，ぞっとする様な気味悪さから思わずのがれたくなる偏執と性的偏倚，不協和音のかん高い旋律で破滅にひきこむ幻覚症状，ニーチェにくらべれば万事が適当な割合で配合されて居り，他人の幸福と成功に悶々とする程不足もしていないし，不満を表明する程憧れも欲求もない。しかしニーチェは何も持っていなかったし全く彼等が望まなかったもの，とりわけ名声とか権力にはことのほか執着を示した。著作の細部にわたって破壊と攻撃がいきわたっていたし，微妙な線をこえることなく，しかも深い関係を生じないで信頼を保ってくれた2，3の友人の寛容さを別にすれば彼は孤独を自ら求めてでもいるかの様に一切の人間関係を断ち切っていった。彼が求めていたのは友人でもなくば愛情でもなく，ましてや騒々しさとか爽快な健康では勿論ない。病気は彼にと

って彼の本質そのものであり，認識の道案内として一切の拘束から解き放つ先験的意欲の根源であった。したがって永遠に続く不快の源泉として彼自らを突き放す様なことは決してしない。彼自身を権威としてうごめくこの不明瞭な傾向は常に新しい行為を約束し，時代の枠を超越して限りない力を与えるかのごとく幻想させる。人類の為に犠牲になるという悲劇的観想が更には予言者に，いなそれどころか神にさえも妥当であるという誇大妄想をひきおこして彼の力となる。

阿片の魅力にとりつかれたクインシー，コールリッジ，ポーがついには誇り高い拒否の言葉を捨てて運命の悪戯にかしずいた様にニーチェも自分自身の影として精神病の要する破壊的傾向へと進路を定める。盛大な歓迎の中で公衆に向い全ヨーロッパの支配者として没落し始めている西欧の救世主として登場すべく彼は破壊的傾向の論証不可能な矛盾，意識内機構の多様にしてかつ複雑な心的傾向へと自らを強制する。彼は至る所で議論の余地を残し，相応した評価の反響をひきおこす科学的実証性を無視して混乱に導き，破壊的，否定的な部分でのみ強烈な印象を与えていく。

註

1) Lange-Eichbaum: Das Genie Problem, Ernst Reinhart Verlag, München 1951.（邦訳島崎他「天才」みすず書房 S. 157）
2) Arthur Schopenhauer (1788—1860) 著の "Welt als Wille und Vorstellung"
3) Emil Kraepelin (1856—1926). ドイツの精神医学者でクレペリンの体系を確立。即ち，人間がひとたび精神病になったら最早彼から大したことは期待出来ないという態度の最後的業績。
4) Das Genie-Problem, S. 73.
5) ibid., S. 28, 29, 30.
6) ヤコブ，メッゲンドルファーにより実証済みである。同様の類例に属する者としてシューマンが度々引用される。
7) F. Nietzsche: Werken in drei Bänden, Carl Hanser Verlag, München 1956, S. 1160.
8) ibid., S. 1167.
9) F. Nietzsche: Nietzsche contra Wagner, Carl Hanser Verlag, München, 1960, S. 1047
10) 燐える頌詩の車に乗って神々のところまで登り，そして闇の中に突き落される青年。
11) 刑場にひかれてゆくキリストを冷罵した報いで永遠に地上を流浪する男。
12) 自分の名前を後世に伝える為にアルテミスの神殿に火をつけた男。
13) Chrinein